

〔シカの生息域拡大過程ならびに捕獲シカの肥育条件の解明〕

再造林地におけるシカの生息分布の実態

新井一司・奈良雅代・中村健一
(緑化森林科)

【要 約】 再造林地 10 地点において糞粒調査を行い、2011 年のシカ生息分布の実態を明らかにした。シカは青梅市や八王子市といった多摩の森林の東南部まで生息エリアを拡げており、今後、都内で伐採した場合、その地にシカが移動してくることが示唆された。

【目 的】

2004 年、奥多摩町多摩川北岸では、ニホンジカ（以下、シカと略す）の食害によって大規模な土砂流出が生じ、大きな社会問題となった。その後、緊急に各種シカ対策がとられ、被害が激しかった高密度地域のシカは減少したが、逆にその周囲へとシカの生息域は拡大していった。一方、東京都は、近年、この生息域が拡大したエリア、東京都シカ保護管理計画で定めた抑制ゾーンにおいて花粉対策事業、いわゆる再造林を盛んに実施している。しかし、この抑制ゾーンにおけるシカの生息分布の実態は、あまりよく分かっていない。そこで、2011 年時点でシカは、どこまで分布を広げているのか、その生息域を糞粒法によって明らかにするとともに、今後、新たに伐採した場合、どこまでシカが移動してくるかを推定する。

【方 法】

調査地は、花粉対策事業で近年伐採した図 1 および表 1 に示した 10 地点である。糞粒調査は、2011 年 10 月から 12 月に行った。1 地点の調査は、約 1 ha 内を 5 m 間隔で 1 m² 内の糞粒数を数え、これを 240 ヶ所行い、平均糞粒密度とした。得られた糞粒密度から林外環境用の東京版シカ個体密度計算プログラム(ver. 0411)を用いて生息頭数を算出し、分布図を作成した。シカの行動範囲については、金子ら(2011)の奥多摩町で捕獲されたメスジカの GPS テレメトリーのデータを用い作図した。

【成果の概要】

1. シカは、図 2 に示したように 2011 年時点で、10 地点中 9 地点に生息していることが明らかとなった。特に 1.0 頭/ha 以上という高密度の場所は、5 地点もあり、青梅市や八王子市といった多摩の森林の東南部まで達していた。シカの生息が確認されなかった 1 地点は、調査時、伐採木の搬出中であったため、シカが警戒したことによるものと推測された。
2. シカの生息が確認された 9 地点において、それぞれ推定されるシカの定着エリアと移動エリアを図 3 に示した。この 9 地点のシカだけでも、今後、都内の山間部のほぼ全域に移動する可能性があることが示唆され、これから伐採する際には、シカの動向に注意する必要がある。
3. まとめ：2011 年時点でシカは、青梅市や八王子市といった多摩の森林の東南部まで生息し、かつ、その周辺で伐採した場合、その地にシカが移動してくる可能性が高いことが示唆された。

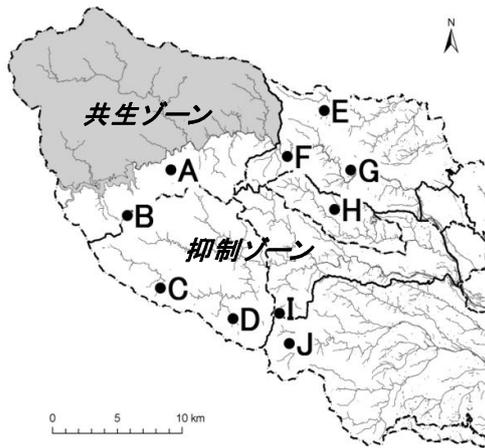
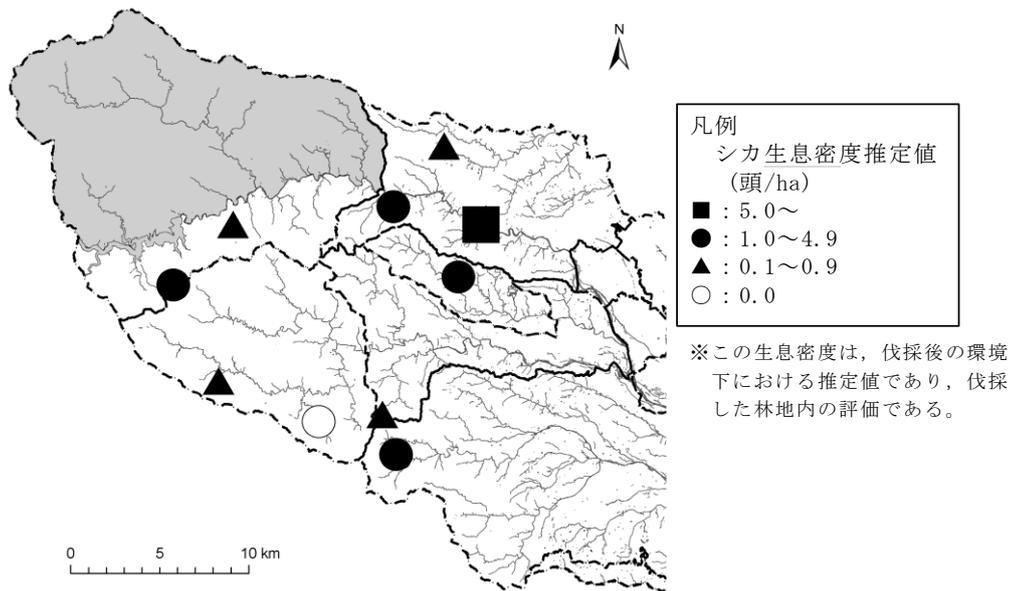


表1 糞粒調査地の概況

地点	名称	伐採面積 (ha)	標高 (m)
A	奥多摩町 境	6.5	620~930
B	檜原村 藤原	2.5	980~1060
C	檜原村 人里	7.1	620~860
D	檜原村 南郷	11.0	460~780
E	青梅市 成木	8.9	260~410
F	青梅市 御岳	4.8	250~500
G	青梅市 日向和田	1.5	220~310
H	日の出町 大久野	0.6	310~370
I	あきる野市 戸倉	5.0	520~740
J	八王子市 上恩方	4.5	420~640

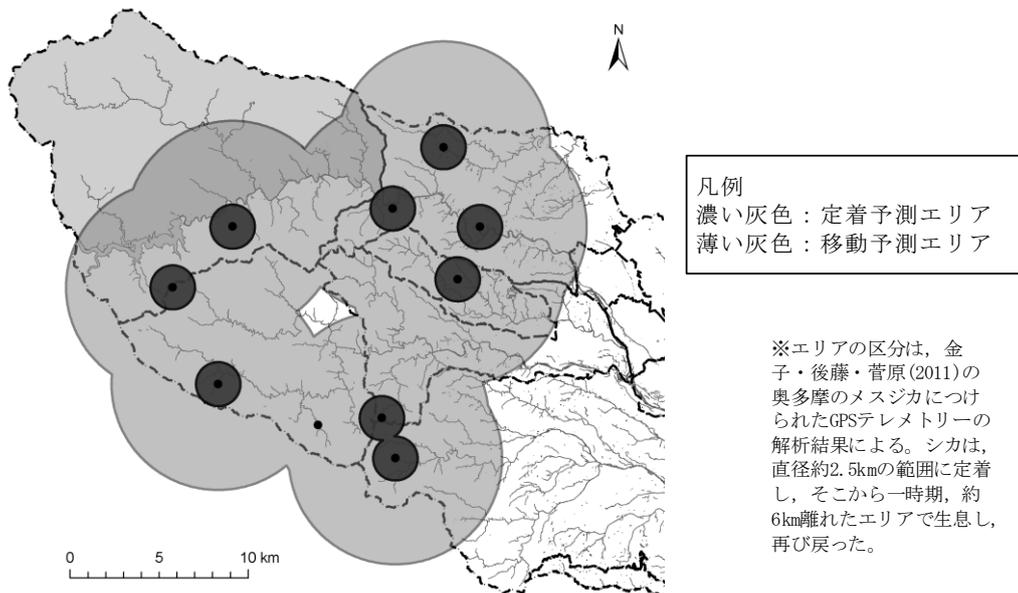
※調査時、地点Dは、伐採木の搬出中だった。
地点Bは、20~30m幅の帯状の再生林地である。

図1 糞粒調査位置図



※この生息密度は、伐採後の環境下における推定値であり、伐採した林地内の評価である。

図2 再生林地における糞粒法によるシカ生息密度の分布図 (2011年)



※エリアの区分は、金子・後藤・菅原(2011)の奥多摩のメスジカにつけられたGPSテレメトリーの解析結果による。シカは、直径約2.5kmの範囲に定着し、そこから一時期、約6km離れたエリアで生息し、再び戻った。

図3 生息が確認された9地点のシカが移動すると推定されるエリア